

令和6年度 中期計画の進捗状況について（概要）

1 中期計画の進捗状況に係る検証について

- ・評価センターでは、①第4期中（令和4年度から令和6年度まで）における評価指標の達成状況及び中期計画の進捗状況について、②中期計画に係る令和6年度の「評価指標の年度目標」及び「本学独自の年度計画」（以下「年度計画」という。）の進捗状況について、各計画担当部署から提出のあった「中期計画の進捗状況に係る点検シート」の報告を基に、評価センター作業部会及び運営委員会において検証を行った。また、令和6年度は、第4期中期目標期間の3年目であるため、国立大学法人評価（4年目終了時評価）に向けて、大学執行部が中期計画全体の進捗状況を確認した。以上の結果については、各計画担当部署へフィードバックし、次年度以降の年度計画の設定の参考とすることで、中期計画の達成を目指すものである。
- ・教育に関する中期計画のうち2-1、2-2、3-1、4-1、5-1については、各計画の評価指標が「外部評価による評価結果」そのものであるため、岡山大学第4期中期目標・中期計画「教育に関する目標を達成するための措置」に関する外部評価報告書を作成する。ただし、第4期中期目標期間の3年目（令和6年度）については、国立大学法人評価（4年目終了時評価）に向けて実績報告書の材料を蓄積し、大学として中期計画全体の進捗状況を確認する目的から、①について評価センターに提出し、大学執行部が確認した。

2 自己評価結果と評価センターによる段階判定

中期計画ごとの評価指標の達成状況及び中期計画の進捗状況について、計画担当部署と評価センターがそれぞれ以下の段階で評価した。評価結果を表に示す。

■評価指標の達成状況

- a：評価指標の達成水準を大きく上回ることが見込まれる
- b：評価指標の達成水準を満たすことが見込まれる **【標準】**
- c：評価指標の達成水準の充足に向けて、課題がある

■中期計画に係る評価

- A：全ての評価指標が達成見込みであり、中期計画を十分に進捗し、優れた実績・成果を上げている
- B：全ての評価指標が達成見込みであり、中期計画を十分に進捗している **【標準】**
- C：全ての評価指標が達成見込みであるが、中期計画を十分に進捗しているとはいえない
- D：1つ以上の評価指標が達成水準を満たしておらず、中期計画を十分に進捗しているとはいえない
- E：1つ以上の評価指標が達成水準を満たしておらず、中期計画を進捗していない

○中期計画に係る自己評価結果と評価センターによる段階判定（中期計画2～5 除く）

中期計画の区分 (中期計画数)	計画担当部署 による自己評価			評価センター による段階判定						(ア)と(イ)が異なる 計画数	
	(定性的)		(定量的)	(定性的)			(定量的)				
	a	b	c	a	b	c	a	b	c		
社会との共創(3計画)	0	1	0	3	0	1	0	1	2	0	
教育(2計画) ※6-1、7-1	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	
研究(4計画)	0	0	0	5	0	0	0	0	5	0	
その他社会との共創、教育、研究(3計画)	0	0	0	3	0	0	0	2	1	0	
業務運営(4計画)	0	5	0	4	0	5	0	1	3	0	
財務内容(1計画)	0	0	0	2	0	0	0	0	1	1	
自己点検・評価及び情報提供(1計画)	0	2	0	1	0	2	0	0	1	0	
その他(1計画)	0	1	0	-	0	1	0	0	0	0	
計	0	9	0	20	0	9	0	4	15	1	

中期計画に係る評価					(イ) 評価センターによる段階判定					(ア)と(イ)が異なる 計画数
(ア) 計画担当部署による自己評価					A	B	C	D	E	
A	B	C	D	E	A	B	C	D	E	
2	1	0	0	0	0	3	0	0	0	2(A→B)
0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	
2	2	0	0	0	1	3	0	0	0	1(A→B)
0	3	0	0	0	0	3	0	0	0	
1	3	0	0	0	0	4	0	0	0	1(A→B)
0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	
0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	
1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1(A→B)
6	12	0	1	0	1	17	0	1	0	

※定量的な評価指標については、計画担当部署で自己評価をしていない。

※中期計画に定めのない本学独自の評価指標も含めて表に示している。

○外部評価報告書を作成する中期計画（2-1、2-2、3-1、4-1、5-1）に係る自己評価結果

教育(5計画) ※2-1～5-1	評価指標の達成状況 (自己評価)	a	b	c	中期計画に係る評価 (自己評価)	A	B	C	D	E
		0	4	1		0	4	1	0	0

※教育の5つの計画（2-1、2-2、3-1、4-1、5-1）は、検証の結果については、外部評価報告書を作成する。

3 評価センターによる主な検証結果

- ・評価センターによる検証において、評価指標の達成状況について「a：評価指標の達成水準を大きく上回ることが見込まれる」と判定した評価指標は4指標、中期計画の実施状況について「A：全ての評価指標が達成見込みであり、中期計画を十分に進捗し、優れた実績・成果を上げている」と判定した中期計画は1計画であった。中期計画の実施状況について、計画担当部署による自己評価では「A」と判定していたものの、評価センターで各計画の進捗状況や優れた実績・成果を上げているかという点に着目して検証した結果、「A」ではなく「B」と判定した計画が5計画ある。自己評価と評価センターによる判定が異なる場合は、その理由を明示し、どうすれば判定が上がるかという観点でコメントを付した。例として、中期計画1-2に付したコメントを以下に記す。また、全体的には、4年目終了時評価に向けて、来年度（第4期中期目標期間4年目）の計画実施における留意事項や検討事項について計画担当部署に向けてコメントした。例として、中期計画10-2に付したコメントを以下に記す：

[評価センターによるコメントの例]

中期計画（1-2）

- ・定量的な評価指標（1）の達成状況について、評価センターでは「a」と判定しました。
- ・中期計画に記載された「国際的なプレゼンスを向上」をどのように実現したのかが読み取れなかったため、中期計画に係る評価は、「B」と判定しました。4年目終了時評価に向けて、「国際的なプレゼンスを向上」をどのように実現したのか、分かりやすい説明と根拠の提示を準備する必要があると思われまます。例えば、「ユネスコ本部と協働構築する20の世界機関の1つに選ばれた」ことによりど

んな可能性が実際に広がり、本学が世界的に認知されることになったのかを明確にできれば、自己評価のとおり「A」と判定できそうです。

- ・「国際的にインパクトのある成果」の定義について、国立大学法人評価委員会等から指摘があった場合に備えて、考え方や根拠等を準備する必要がありますので、ご注意ください。

「国際的にインパクトのある成果」の定義や考え方については、R6.2.27 に文部科学省に「国又は国際機関等の世界に通用する第三者により選出・評価された取組や、当該第三者を通じて世界に向けて発信されるなど、本学のプレゼンス向上に直結した取組等を計上している。」と回答していますが、学内において、より具体的な基準や根拠の整理が必要ではないでしょうか。

中期目標	(1) 我が国の持続的な発展を志向し、目指すべき社会を見据えつつ、創出される膨大な知的資産が有する潜在的可能性を見極め、その価値を社会に対して積極的に発信することで社会からの人的・財政的投資を呼び込み、教育研究を高度化する好循環システムを構築する。		
中期計画	グローバル・エンゲージメント戦略の下、①ユネスコなどの国際機関との直接的連携による「ESD for 2030」の推進、②国連貿易開発会議や米国国務省との直接的連携による SDGs に関する教育研究の高度化、③「One Young World」など SDGs に関連する世界的次世代リーダーネットワーク活動への参画、④地球レベルの優先的課題に関する世界トップレベルの大学との国際共同研究などによる成果を、国際会議などで積極的に発信し、国際的なプレゼンスを向上させる。		
中期計画に定められた評価指標	(1) 中期計画に挙げた取組などによって国際的にインパクトのある成果を第4期中に6件上げる。		
評価指標の目標値	(1) 6件 (第4期合計)	評価指標の達成状況	(1) 11件

中期計画 (10-2)

- ・定量的な評価指標 (1) の達成状況について、評価センターでは「a」と判定しました。
- ・評価指標の年度目標が抽象的であり、どこまで達成されているのかが分かりにくいのが課題です。4年目終了時評価に向けて、中国・四国地域の医療提供体制の安定化について、具体的な数値があれば、評価されやすいと思われます。また、評価指標 (10 施設) を達成することで、第3期終了時 (6 施設) と比べて、どのような点で医療事業が発展しているのか具体的な説明があるとよいと思います。
- ・中期計画の内容が抽象的であることから、中期計画の実施状況では、本学が構築しようとしている姿と現状の特色・成果等がわかるように記載願います。
- ・現状、中期計画に係る評価は「B」ですが、中期計画に記載の「ホスピタル・ネットワーク構築」後に、当該ネットワークを活用し、中期目標の「持続可能な地域医療体制の構築」にどう貢献できているのかを具体的に示すことができれば、「A」と判定できそうです。
- ・「DCT (分散型臨床試験)」などは、専門外の人にもわかるように、その内容や目的、意義について言及するようお願いします。

中期目標	(10) 世界の研究動向も踏まえ、最新の知見を生かし、質の高い医療を安全かつ安定的に提供することにより持続可能な地域医療体制の構築に寄与するとともに、医療分野を先導し、中核となって活躍できる医療人を養成する。(附属病院)		
中期計画	地域の医師偏在に対応した、持続可能な地域医療提供体制の構築とともに、地域中核病院間連携の推進と、中国・四国地域に点在する中核病院間を結ぶホスピタル・ネットワークを構築する。		
中期計画に定められた評価指標	(1) 中国・四国地域の病院間連携を強化・拡充するための仕組みを構築し、当該地域の医療提供体制安定化に貢献する。：病院間連携の仕組み構築と参加施設数 10 施設		
評価指標の目標値	(1) 10 施設 (第4期終了時)	評価指標の達成状況	(1) 10 施設

- ・「教育に関する目標を達成するための措置」（中期計画 2-1、2-2、3-1、4-1、5-1）に関する外部評価報告書は以下のとおり。

令和 6 年度 外部評価報告書

<https://www.inec.okayama-u.ac.jp/external/external-report02/>

令和 5 年度 外部評価報告書

<https://www.inec.okayama-u.ac.jp/external/external-report/>

4 大学執行部による確認

大学執行部が中期計画全体を通して進捗状況を確認し、全 24 計画のうち 17 計画に計画担当部署に向けたコメントを付した。取り組んだ事項とその成果について「高く評価できる」「評価できる」とコメントした計画が 7 計画、「順調」とコメントした計画が 2 計画あり、全体として順調に進捗しているとの見方を示している。このほか、計画ごとに、成果をよりアピールできる事項の指摘や、取組をよりよくするためのアドバイス等も行った。また、進捗が気になる計画や全学で取り組むべき事項がある計画には、改善のための方向性を示唆するコメントを付した。例として、大学執行部のみが確認する教育に関する中期計画から、中期計画 2-1 及び中期計画 5-1 に付したコメントを以下に記す：

[執行部からのコメント等の例]

中期計画（2-1）

- 教学マネジメント体制構築のための組織の見直しが進んでいると評価できます。
- 体制整備による成果は、中期計画さらには中期目標の達成につながると考えられますので、学士課程全体のカリキュラム改善などの状況（評価）を示していただけるとさらに評価が上がるのではないのでしょうか。
- 学部のカリキュラム改革については、目的を明確にした上で、全学としてある程度統一した方向性または評価の枠組みが必要ではないのでしょうか。

中期目標	（2）学生の能力が社会でどのように評価されているのか、調査、分析、検証をした上で、教育課程、入学者選抜の改善に繋げる。特に入学者選抜に関しては、学生に求める意欲・能力を明確にした上で、高等学校等で育成した能力を多面的・総合的に評価する。		
中期計画	（2-1）教育の質の向上を図るために、本学学生に対する社会からの評価や要請を分析・検証し、何を身に付け、何ができるようになったかを重視するカリキュラムへの改善を推進することと併せて、入学者選抜の方法・内容を見直す教学マネジメント体制を恒常化する。		
中期計画に定められた評価指標	（1）現況を確認できるモニタリング指標を活用し、有識者・専門家による外部評価において、恒常的な内部質保証プロセスとして、各部局等の教学現場と大学執行部との連携が機能していることが認められる。 <モニタリング指標例> 企業等からのヒアリング、卒業時アンケート、成績評価、授業評価、学生生活実態調査、新入生アンケート、入学者選抜データ、内部質保証ガイドラインの進捗状況、各部局の改善事例、全学の改善事例、国際交流データ		
評価指標の目標値	－	評価指標の達成状況	<p><R4～R6 年度の実績> 令和 6 年度の外部評価委員会において、教学マネジメント体制の構築が進み、情報の集約と状況の把握が行われ、会議体の設置による横断的な情報共有や連携の仕組みが整いつつあることが認められた。</p> <p><R7～R9 年度の見込み> 令和 6 年度までに整備した教学マネジメント体制を恒常的に駆動するとともに、モニタリング指標を選定し、それに基づいた</p>

			自己分析・評価を行える体制整備を進める。それにより、外部評価委員会において「各部署等の教学現場と大学執行部との連携が機能していること」、「恒常的な内部質保証」が成立していると認められる見込みである。
--	--	--	---

中期計画（5-1）

- 学位プログラム化が完了し、キャップストーン科目が実施されているのであれば、それが本来の人材養成の目的に寄与できているかどうかの検証が必要ではないでしょうか。アンケートに加えて、成績などの数値では測れない素養もあると思いますので、評価指標の達成状況の報告では工夫が必要です。中期計画の最終目標は学位プログラムの「検証・改善」ですので、4年目終了時評価では少なくとも検証の段階まで進めていただきたいと思います。

中期目標	（5）深い専門性の涵養や、異なる分野の研究者との協働等を通じて、研究者としての幅広い素養を身に付けさせるとともに、独立した研究者として自らの意思で研究を遂行できる能力を育成することで、アカデミアのみならず産業界等、社会の多様な方面で求められ、活躍できる人材を養成する。（博士課程）		
中期計画	自らの意思で研究を遂行でき、社会の多様な方面で活躍できる知のプロフェッショナルを養成するために、異なる分野の研究者等との協働を通して、SDGs等の社会課題解決に貢献できる広い視野と深い専門能力を涵養する新たな学位プログラムを開発・実施し、検証・改善を図る。具体的には、幅広い素養と深い専門性を涵養するコースワークとともに、国内外の学術コミュニティや産業界との「共育共創」のフレームワークで実施する課題解決型在外実習を含むキャップストーン科目（学生が教育課程で学習した知識や技能を自在に活用した、実践的な問題解決を含む集大成的な学修科目）を導入する。		
中期計画に定められた評価指標	（1）モニタリング指標を活用し、外部有識者による検証によって、全ての研究科で新たな学位プログラムが実施されており、その中で必修のキャップストーン科目としてプラクティカム（企業や研究機関等が実際に直面している課題に学生が取り組み、教育課程で学習した知識や技能を適用する課題解決型在外実習）が導入され、課題解決力の高い人材を養成していることが認められる。 <モニタリング指標例> 研究科での新学位プログラム実施状況、プラクティカム導入専攻数、学生や企業等からのヒアリング・評価、修了時アンケート		
評価指標の目標値	－	評価指標の達成状況	<R4～R6年度の実績> 令和6年度の外部評価委員会において、学位プログラムの全体像は明らかになったと認められたが、キャップストーン科目の元となる「知のプロフェッショナル」の人材像や研究の形が明確ではないとの指摘を受けた。 <R7～R9年度の見込み> 博士課程学生に対して課題解決の意識に関する項目を含めたアンケートを実施し、その結果及び履修・成績データを分析・検証し、キャップストーン科目を改善していく見込みである。

5 評価センター 所見

第4期中期目標期間4年目終了時評価を翌年度に控えた令和6年度の取りまとめにおいては、これまでの視点に加えて、中期目標期間全体の達成を見据えた検証となることを意識した。これは、年度計画の達成を積み上げることで予定調和的に中期計画そのものが進捗するとは限らず、中期目標期間全体を見通した進捗状況の確認が必要であることが令和5年度までに見えてきたためである。

具体的には、令和6年8月末時点でのモニタリングの結果をもとに、4年目終了時評価のシミ

ュレーションを試み、さらに年度末時点でのレビュー結果をもとに、上記 2 に掲げた計画担当部署による自己評価結果を得て、評価センターによる段階判定を行った（中期計画 2-1、2-2、3-1、4-1、5-1 を除く）。その結果、19 の計画のうち 17 計画が「B：全ての評価指標が達成見込みであり、中期計画を十分に進捗している」と判定され、「A：全ての評価指標が達成見込みであり、中期計画を十分に進捗し、優れた実績・成果を上げている」と「D：1 つ以上の評価指標が達成水準を満たしておらず、中期計画を十分に進捗しているとはいえない」と判定された計画は 1 計画ずつであった。「B」と判定された計画のうち 5 計画は、計画担当部署による自己評価が「A」であったが、レビューのプロセスの中で評価センターからフィードバックを行ったうえで、「B」としたものである。上記 4 に示したとおり、点検シートの記載内容から明確に優れた実績・成果であるといえる記載があれば「A」と判定しうる内容であったが、明確であるとは言えず、外部からどう見えるかという視点で考えると、今回は「B」判定とせざるを得なかった。しかしながら、令和 6 年度末の時点では、おおむね順調に進捗しており、何件もの優れた実績・成果を主張しうるだけの成果も上がりつつあることが見えてきた。今後は、それらを学内外のステークホルダーに向けてわかりやすくアピールする報告ができるよう、記載に工夫が必要である。一方で、「D」判定であった計画については、4 年目終了時点で、中期目標期間中の達成を十分見込むことができるだけの実績が上がることを望まれる。

評価センターでは、それぞれの中期計画ごとに「中期計画の進捗状況に係る点検シート」を用いて進捗状況の確認と検証を行っているが、この点検シートはロジックモデルを可視化するという発想で作ってある。つまり、資金やマンパワーの投入（インプット）、活動状況（プロセス）、活動の結果、何をなしたか（アウトプット）、その結果、どのような変化を生じさせることができたか（アウトカム）、そして社会にどのように貢献できたか（インパクト）が左欄から右欄に連続して記載できるようにしてある。このような設計になっている理由は、中期計画を実施するにあたって PDCA サイクルが回るのを可視化できること、大学の経営状態が可視化されることで、経営判断に資すること、各計画担当部署が次年度の計画を作成する基礎となることがあげられる。加えて、4 年目終了時評価のための実績報告書を記載する際の基盤的情報源とするためである。

今回の検証作業を進めていく中で、十分な成果が上がっていると推測されるにも関わらず、アウトプットやアウトカム、可能な場合はインパクトが、十分に記載されていなかったり、あるいはアウトプットかアウトカムかが必ずしも明瞭でなかったりなど、さらに記載があればと思うものもあった。そのような点については、今回評価センターから「確認事項」や「追記事項」の形で、各計画担当部署に照会し、記載の追記や修正を促した。こうした点検シートの構造を理解したうえで、4 半期毎などの適宜のタイミングで点検シートを活用することで、中期計画の確実な進捗の助けにしていいただければと考えている。評価センターは今後も各計画担当部署との情報共有を基盤として連携・協力し、4 年目終了時評価に臨みたいと考えている。

なお、評価センターでは中期計画 2-1、2-2、3-1、4-1、5-1 に係る進捗状況の検証は行わないが、上記 1 で述べたとおり、大学として中期計画全体の進捗状況を確認する目的で、評価指標の達成状況及び中期計画の進捗状況について、点検シートによる報告を受けた。これらを含め全ての中期計画について、大学執行部が点検シートの記載をもとにコメントを付した。大学執行部のコメントを各計画担当部署に伝えることで、それぞれの部署での今後の計画推進への指針となるものと思われる。

令和 7 年度はいよいよ第 4 期中期目標期間の 4 年目であり、年度末時点で各中期計画が期間中に達成される見通しであることと、優れた実績・成果が上がっていることがとても重要である。評価センターは、引き続き上述のとおり各計画担当部署に寄り添いながら中期計画の進捗を見守るとともに、4 年目終了時の評価に向けて準備を進める所存である。